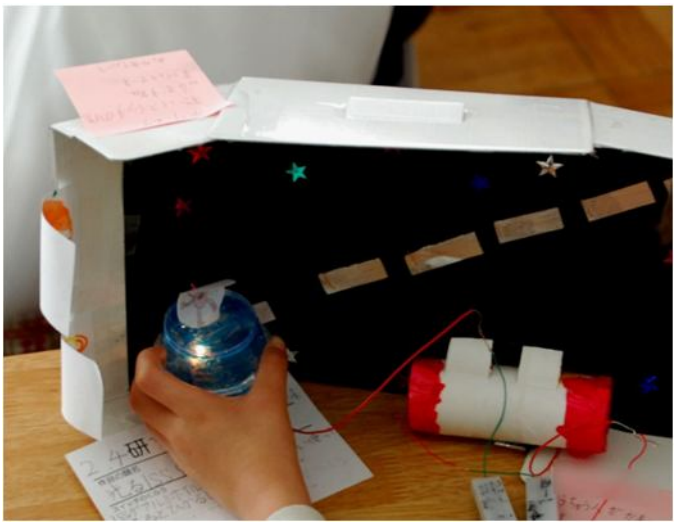
「日々の理科」（第 244 号） 2015（H27),-3,-2

「豆電球博覧会（３）」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

公開研究会での豆電球博覧会は、あまり時間もなく、教師の余計な説明で時間をとったので、実際に子どもたちが作品を見合う時間はあまりとれなかった。本校のように 40 分の授業の中で、さまざまな要素を盛り込むのは無理がある。教師根性をどれだけ押さえて、子ども主体の授業を構成してゆくか・・・それを常に課題と感じている。

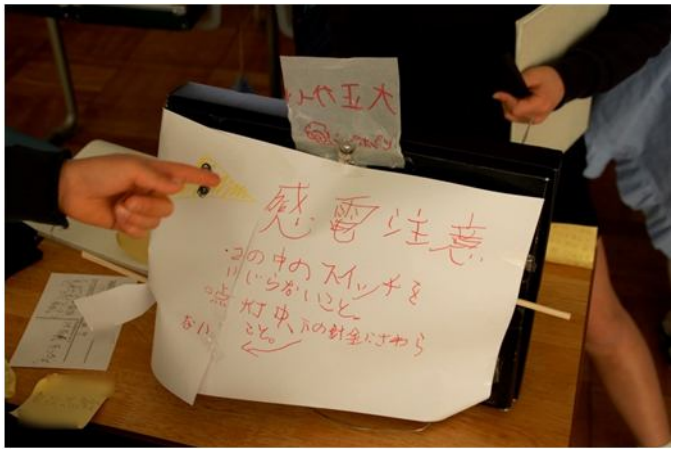
そんなわけで、公開研究会後に、もう一度「豆電球博覧会」を開催した。他のクラスの作品もあわせて、子ども達の工夫を紹介したい。



「点滅する国際宇宙ステーション」（２名共同作品）
アルミホイルに触れた時だけ、宇宙船の中の豆電球が点灯する。動かすと点滅する仕組み。ＵＦＯも加わって、前回よりもグレードアップしていた。

「緊急自動車」　屋根のスイッチは「はんだ線」をバネ状にして工夫している。

「昆虫クイズマシン」
裏側に出題者がいて、昆虫が光る。その光った昆虫の特徴を手前の紙から選ぶ・・・という凝った作品。「ただ今５分待ち」の行列ができていた。



「感電注意？」
実際は感電するわけではないのだが、どうも中に手を入れてイタズラをする子どもが多かったらしく、業を煮やした作者が警告したもの。

まあ、どの作品も実に面白い。学年に 100 人子どもがいれば、100 通りの工夫と努力がある。一見雑な造りの作品も、実はその制作過程の努力や工夫が隠されている。教師は、その一つひとつの「学びの履歴」をしっかり読み取ってあげなければいけないと思う。

（つづく）